

テモテへの手紙第二2章10-13節 「忍耐の末の栄光」

1A 永遠の栄光 10

2A 真実なことば 11-13

1B 死後のいのちと栄光 11-12

1C 死後のいのち 11

2C キリストとの統治 12

2B キリスト否定への警告 12-13

1C キリストからの否認 12

2C キリストの真実 13

本文

私たちの聖書通読の学びは、テモテ第二2章に入ります。午後に一節ずつを見て行きますが、今朝は、10-13 節に注目します。「10 ですから私はすべてのことを、選ばれた人たちのために耐え忍びます。彼らもまた、キリスト・イエスにある救いを、永遠の栄光とともに受けるようになるためです。11 次のことばは真実です。「私たちが、キリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きるようになる。12 耐え忍んでいるなら、キリストとともに王となる。キリストを否むなら、キリストもまた、私たちを否まれる。13 私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。」

パウロは、今、牢獄にいます。そして皇帝によって死刑判決を受け、斬首されることがかなり明らかになっています。死が目前に迫っているのです。そのような中で、彼はみことばを伝える働きをしています。驚くことに、牢屋に入れられても、死が目の前に迫っていても、それでも、みことばを伝えるべく耐え忍んでいたのです。選ばれた人々がいて、その人たちが救いを共に受けるようにするためだと言っています。そして、その先にある永遠の栄光を共に受けると言っているのです。

1A 永遠の栄光 10

死が近いのに、そんなことまで考えられているのか？と驚きますが、いや、むしろ死が近いので、永遠の栄光という先のことが現実味を増していると言えるでしょう。牢獄に入れられて束縛されているから、みことばが縛られることなく、人々に伝えることをよく知っているということが出来るかもしれません。

人は、自分の環境や身体に自由が利かなくなった時に、キリストにあって自由が増し加わるということも良いかもしれません。アメリカの刑務所で、死刑囚の人々に牧師さんが説教していました。そこで、イエス様がいのちのパンであるという箇所から話しましたが、前置きで、こう伝えています。

「その説教は、教会ですで行ったものです。けれども、あなたたちは、この場所で閉じ込められていて、あとは天を待つのみになっているけれども、その望みを抱くのは、教会の人々よりもはるかに容易です。教会の人々は、日々、自由と繁栄という偶像と戦わなければいけないからです。」と言いました。¹

もう一人、星野富弘さんのことを思います。数年前に、教会の人たちと尾瀬の旅に行った帰りに、星野富弘美術館に立ち寄りました。彼の数多くの絵画と詩を見ました。私は思いました、「彼は、なんと自由なのか！ 私たちが見ていないもの、見えていないものを、彼は何と数多く見ているとか！」手と足が不自由で、口で筆を持っています。そして、何時間も花の姿を見て、そこから詩を書いて、絵を描いているのです。

牢屋にいて、死を待っているパウロは、その縛られた状態だからこそ、むしろ自由にされて、福音を語れているのだと思います。もし私たちが、次のことができれば自由になれます。一つは、パウロと同じように、永遠の栄光、すなわち、かの世における栄光、天における栄光、神の国における栄光をしっかりと見て、これに感動し、喜び、楽しみを見だし、希望を抱くことです。たとえ、この天地が過ぎ去っても、依然として残っている、神の都のことを思うことです。「詩 46:1-5 神はわれらの避け所また力。苦しむときそこにある強き助け。2 それゆえわれらは恐れない。たとえ地が変わり山々が揺れ海のただ中に移るとも。3 たとえその水が立ち騒ぎ泡立ってもその水かさが増し山々が揺れ動いても。セラ 4 川がある。その豊かな流れは神の都を喜ばせる。いと高き方のおられるその聖なる所を。5 神はそのただ中におられその都は揺るがない。神は朝明けまでにこれを助けられる。」外の自由が取られている時に、人生の中で最も大切にしなければいけないことが、浮き彫りにされます。いよいよ明らかにされます。第一のものを第一のものにしやすいのです。

自由を奪われた人で、今すぐに来る天を仰ぎ見た人が、福音書に出てきます。イエス様の横に十字架に付けられた人です。彼こそが、死が近づいていて、十字架の上で身動きができません。けれども、イエス様が約束されました。「ルカ 23:43 まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

次に、その自由をもって、今を生きることです。終わりがはっきり分かって、今を生きるのです。パウロは、ピリピ人への手紙の中で、「1:21 私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。」と言いました。生きることはキリストという、焦点を合わせた生き方をすることができるのです。今の世において、しなければいけないことがいろいろあります。多くの人は、それらのしなければいけないことに優先順位がついていません。一つ一つが、決して悪いことではないかもしれない。けれども、何がもっと大切なのかが分からないので、右往左往しているのです。しかし、どうでしょう？ 私が死の床に着いている時に、私の目標は、イエス様にお会いすることなのだ！と知っていたら、ど

¹ <https://youtu.be/8TAS3xbol8o>

うでしょうか？ただ、この方を喜ばせる生き方をしたいと願うはずです。そして、その生き方からそれるようなことは、やりたくないと思います。ですから、終わりにどうするのかを知って、キリストにあずかることを知って、それから今をどうするか、その優先順位を整理するのです。

2A 真実なことば 11-13

1B 死後のいのちと栄光 11-12

1C 死後のいのち 11

そして 11 節、「次のことばは真実です。「私たちが、キリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きるようになる。」」とあります。真実なことばとして、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きる、ということです。自分が今、キリストと共にいて、それで死んだのであれば、そのままキリストと共に生きるのだということです。ピリピ人への手紙で、パウロはこう言いました。「1:23 私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。」

私たちは、もちろん、霊的にはすでに、キリストと共に死に、そしてキリストと共に生きています。バプテスマが、それを見える形で表しています。古い自分は、キリストと共に死に、葬られました。もう死んでいるのです。そして、キリストにあるいのちを得て、新しく歩んでいます。自分中心の生き方に決別しました。そして、罪に支配されているその自分は、いつも死んでいると確認するのです。信仰によって確認するのです。そして、新しくされた自分が、キリストを自分のいのちとして生きているのです。

こうやって生活の中で、人生の中で、キリストと共に生きているならば、いつしか自分の肉体が滅びる時が来ます。その肉体が滅びる時にも、キリストが共におられることを知っています。そのキリストのご臨在は、主がおられることは、肉体の死によって途切れることは全くありません！ある人が言いましたが、自分のこの世での最後の息を引き取ったら、次の瞬間に、天において次の呼吸をしている。世を去れば、それはそのままキリストとともにいることになります。

パウロは、これから殉教するのですが、同じように殉教した人で、イエス様を仰ぎ見た人がいました。ステパノです。彼が、ユダヤ人の最高議会、サンヘドリンで弁明すると、聞いていた者たちは、はたわたが煮え返る思いで、彼に向かって歯ざしりしていました。「使 7:55-56 しかし、聖霊に満たされ、じっと天を見つめていたステパノは、神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見て、「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます」と言った。」

このように主と共に歩んでいるならば、死によってその歩みは途切れることなく、そのまま主にお会いするのです。しかし、主が生きているうちに戻って来られるかもしれません。その時も同じです。「I コリ 13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られてい

のと同じように、私も完全に知るようになります。」私たちの愛する主を、顔と顔を合わせて見るようになります。改めて尋ねますが、この方のお会いするという目標で、今を生きていますか？

2C キリストとの統治 12

そして、「**12 耐え忍んでいるなら、キリストとともに王となる。**」と、パウロは言っています。黙示録 1 章にも、「ご自分の父である神のために、私たちが王国とし、祭司としてくださった方」とあります(1:6)。ここに、パウロが 10 節で話している、「永遠の栄光」が反映されています。キリストとともに王になる、ということを、あまり意識していないかもしれません。けれども、私たちが神の国の計画の中にいることを知ってください。神の目的は、ご自分のかたちに人を造られて、ご自分の造られたものを支配させることでした。「創 1:26 神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」」神がすべてを支配されているように、神のかたちに造られた者も、神に支配されながら、それらの被造物を支配するように命じられています。これが、神の国の姿です。

ところが、アダムが罪を犯しました。それで、その支配の力が悪魔に移ってしまいました。それで、悪魔は世の神と呼ばれるようになり、世界を支配するようになります。それを神のもとに奪還するために来られたのが、キリストです。この方がご自身のいのちを代価にして、悪魔の支配にいる者たちを買い取られ、神のものとされました。そして、この世界も、ご自身の死とよみがえりによって、父なる神のものにされたのです。そこで、キリストにあって私たちが、神の子どもとされて、神の子どもとして、神の国を受け継ぐようにされたのです。「エペ 1:10-11a 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。」

私たちが、主に天においてお会いして、それから栄光の姿で主と共に地上に来て、そしてキリストを王の王とする国で、共に統治するようになります。イエス様は、このことについて、何度か、たとえでお語りになりました。その一つがタラントの喩えです。主人が旅に出る時に、しもべたちに自分の財産を預けます。能力に応じて、一人には五タラント、次の人には二タラント、そしてもう一人には一タラントを渡します。五タラントと二タラントを受け取ったしもべは、それぞれが商売をして、二倍にしました。一タラントを受け取った人は、地面に穴を掘って隠していました。五タラントと二タラントをそれぞれもうけたしもべに、こう語られました。「**マタ 25:21 主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』**」

ここで、主が報いを与えておられるのは、「**わずかな物に忠実だったから**」ということなのです。主から任されていることに、私たちが応答して、その召されたことに忠実であることです。例えば伝道者

が、数多くの人をキリストに導いたというのと、母親が子をキリストにあって育て上げ、その子がキリストを愛して、この方に仕えているということと、どちらも同じ報いを受けるということです。自分が召されたことに応答して、そこに忠実であるかが試されます。

そして、ここでパウロは、耐え忍んだ者が、キリストと共に王となるとあります。キリストが苦難を経た後に栄光に入られたように、キリストにつく者も、苦しみ後に栄光に入ることが約束されています。「ロマ 8:17 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」

この、「栄光の前の苦しみ」を味わった人で、ヨセフがいます。彼は、兄たちや、父、母が、自分にひれ伏すようになるという夢を見て、解き明かしました。それで兄たちの妬みと憎しみを買い、エジプトに奴隷として売られてしまいました。さらに牢屋に入れられました。けれども、二年後にファラオが夢を見て、それは七年の豊作とその後の七年の飢饉を予め伝えるものでした。ヨセフがそれを説き明かしたので、ファラオの次に権力のある人物、支配者となったのです。

そして、ヤコブの息子たちが食料を買いに来た時に、自分の見た夢が実現しました。兄たちが自分にひれ伏すのです。その後、ベニヤミンのことでいろいろやりとりがあって、ついに、自分がヨセフであることを明かします。そして、彼らが自分を売ったという悪はあるが、神はそれを益に変えてくださった。ヤコブの家族が飢饉から救われるために、神が予めエジプトに私を遣わしたのだ、と言いました。

このように、ヨセフは自分が栄光の座に着くことを予め知らされていました。けれども、その将来の栄光のゆえに、今はむしろ苦しみを経ることになります。キリスト者も同じです。キリストにあって生きようとする者は、義に飢え渴きます。けれども、まだ義に満たされていません。主ご自身が戻って来られて、初めて満たされます。将来の栄光の約束が既に与えられています。けれども、今は満たされていません。それでうめくのです。こうした内なる葛藤があります。また、キリストにあって生きようすると、世から憎まれます。反対を受けます。内からも外からも、耐え忍ぶということをして、初めて得られる栄光です。

2B キリスト否定への警告 12-13

1C キリストからの否認 12

「12b キリストを否むなら、キリストもまた、私たちを否まれる。」と次に話しています。こうした、キリストの恵みを否むのであれば、恵みのない世界を自分自身に負うことになります。C.S.ルイスが雄弁に語りましたが、「世界には二種類の人々に分れる。一方は、神のみこころがなるように、と神に言う人たち。もう一方は、神が、「よし、それなら君のやりたいように」と言われる人々だ。」つ

まり、自分がキリストを否むのであれば、キリストはその拒絶を無理やりに変えることはできない、ということです。キリストを否むなら、その人とは関わりを持たない、その意志を尊重しなければいけないから、ということになります。イエス様が、そのことをお語りになっていました。「マタ 10:33 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも、天におられるわたしの父の前で、その人を知らないと言います。」

2C キリストの真実 13

13 私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。

これは、キリストを否むことで真実でなくても、キリストに影響を与えることはない、ということです。2×2は4ではないと否定したところで、2×2は4であるということは、真実ですね。イエス・キリストを否んだところで、イエス様がいなくなるわけではありません。ある、クリスチャンたちによるパントマイムが心に残っています。二人の人がいて、さらにイエスを演じる役の人がいました。イエス役の人は、十字架にかかっているふりをしています。その姿を見て、一人は祈りの姿勢を示しています。もう一人はそっぽを向いています。けれども、同じイエス様であることには変わらず、そっぽをむいても、全く変わることはないのです。

ですから、もしキリストを否むのであれば、ご自身が真実でないことはできないので、その人をそのまま受け入れることはできません。そういえば、イエスを知らないと言って否んだ人がいましたね。ペテロです。しかし、主は、悔い改めているペテロを受け入れられました。ペテロが悔い改めという真実を行ったからです。主は真実で正しいお方ですから、罪を赦し、すべての不義から清めてくださいました。主は、私たち一人一人にもそのことをしてくださいます。

私たちの前にある道は狭い道です。主は、狭い門から入りなさいと言われました。それは、キリストを目標とする道です。他のいろいろなものを省いて、この方に従わないといけません。しかし、報いは大きいのです。その報い、永遠の栄光にあずかるのです。